

## シンガポールにおける華僑社会構造の発展

内田直作

シンガポール中華総商会の帮別制 II 「新嘉坡中華商務總會」創立時（一九〇六）の役員数は、福建帮一六名、広東帮二四名であることを明らかにしておいたが、事実上両帮のみにとどまるものでなく、さらに潮州帮・海南（琼）帮・客家帮等に細分されていたことは、予測にかたくない。

今、それを一九一九年公表の「新嘉坡中華総商会己未年（一九一九）徵信録」によると、各帮は次の通りに構成されていた。

帮別名	会名舗号数	会員数
福建帮	一三八	一五二
広 帮	三六	四四
潮 帮	一五一	五八

シンガポールにおける華僑社会構造の発展

シンガポールにおける華僑社会構造の發展

琼(海南) 帮	二二三	二七
嘉(嘉庇州客家) 帮	一四	一一
埔(大埔客家) 帮	五	一〇
クアラルプールの分号	一六	
セラシゴール州		—
ペラ州		—
マラッカ		—
スレンバン	三	
サラワク	—	
その他	一六	二七

右によれば、店舗数と個人会員数においては、第一位福建帮・第二位潮帮・第三位広帮・第四位海南帮・第五位嘉(嘉庇州) 帮、第六位埔帮(大埔集) 帮の順位となっており、そのほか本拠をシンガポールにおくものは、クアラルプールの分号が最高位にあることが明らかにされる。広東帮の細分化によって海上商人型の福建帮が開港都市シンガポールにおいて、初期の広帮進出にもかかわらず、福建帮が漸次優位を占めていったことが明らかにされる。

福建帮のうちには、ゴム王として、また抗日救国運動の指導者の「謙益号」陳嘉庚有限公司主の陳嘉庚(同安県、一七八四—一九六一)、その他和豊輪船公司の林乘祥(龍溪県、一八七三—一九四四)等の領袖達の名もみい

だされる。潮幫には、王成号布莊主の揚績文（たかひしんぶん）（潮安県）、四海通銀行・順隆香油郊・再和茂の李偉南（りゐん）（澄海県）等の「韓江系」の領袖が名を列ねている。

広幫では、シンガポール開港の際に、大きな役割を果たした曹亞志（台山県）がイギリス東インド会社員のラッフルズと協力した事例があるが、前号に述べたごとく二十世紀にはいと停滞的となり、著名の商号、領袖をみいだしがたい。ついで、海南幫についても、経済的に低位を反映してか同様の傾向がみられる。

第五位の嘉（嘉庇州）幫と、第六位の埔（大埔県）は何れも客家幫であるが、第六位の埔幫の会員のうちには、藍晋臣・藍森堂・藍鏡清のごとく、シンガポールの當舖（質屋）業をほとんど独占していた藍氏一族の名がみだされる。

さらに、その二年後の一九二一年度の「新嘉坡中華総商會民國十・十一両第十三屆職員表」によると、会董数は計三八名であって、その内訳は次の通りとなっている。

福建幫	一五名	潮州幫	一一名
広幫	六名	嘉幫	二名
埔幫	一名	海南幫	二名

会長は潮州幫の「林義順」（通美行・ゴム・土産・家屋土地業）、副会長は林推遷（海澄県、瑞豊盛号、錫・汽船・ゴム・南洋土産・家屋土地業）であって、海上商人型の福建幫と潮州幫の支配的地位が目立ってきている。

右のうち、潮州幫についての内容は、すべて韓江系（潮安・澄海・饒平の三県）であって、榕江系（潮陽・揭陽・普甯の三県）は一名もみいだされないことである。当初の潮州幫は韓江系のみで占められていた。後年には同幫内

シンガポールにおける華僑社会構造の発展

シンガポールにおける華僑社会構造の発展

に後述のごとく、勢力の交代がみられる。次に、広幫については、職人的色彩のつよい四邑系（開平・恩平・新開・台山の四邑）が四名で、広州市に近接する商人的な三邑（南海・番禺・順徳の三邑）系の南海県人が二名となっている。海南幫については、タイ国の場合のごとく文昌県出身者が圧倒的多数を占めるのに対して、シンガポールの場合は文昌県の南方の萬泉河河口の楽会県人二名となっており、地域的な集団的分散性が観取される。

会董数に比例して、各幫の経済的勢力も優位を占める。その一根據として、前掲一九一九年度の徴信録によると、各幫から総商会への会費納入額についてみれば次の通りである。

1、福帮會員舖号年捐計一三八号	計銀	一、六五六元
福帮會員人名年捐計一五二名	計銀	九一二元
2、広帮會員人名舖号年捐計三六号	計銀	四三三元
広帮會員人名年捐計四四名	計銀	二六四元
3、潮帮會員舖号年捐計一五一号	計銀	一、八一二元
潮帮會員人名年捐計五八名	計銀	三四八元
4、琼（海南）帮會員舖号年捐計二三号	計銀	二六六元
琼帮會員人名年捐計二七名	計銀	一七二元
5、嘉（嘉庇州客家）帮會員舖号年捐計一四号	計銀	一六八元
嘉帮會員人名年捐計一名	計銀	六六元
6、埔帮會員舖号年捐計五号	計銀	六〇元

埔帮會員人名年捐計一〇名

計銀 六〇元

7、外埠會員舖年捐計一六号

計銀 一九二元

外埠會員人名年捐計二七名

計銀 一六二元

8、外埠會員人名補納戊午年捐計五名

計銀 三〇元

9、外埠會員人名補納丁巳年捐計四名

計銀 二四元

10、外埠會員人名補納丙辰年捐計二名

計銀 一二元

11、各帮新入會員樂捐計三七名

計銀 一、一一〇元

12、利息收財政所除貼四海通外夷

計銀二二、〇七九元六角七占

13、利息收内国公債票

計銀 四一二元〇五占

14、利息收英国軍債票

計銀 四六六元四角八占

以上進款計二一条合共來大銀三〇、七〇四元二角

右の収入金のうち、福帮計二、五六二元、潮帮計二、一六〇元、広帮計六九六元、瓊帮計四三八元、嘉帮計二三四元、埔帮計一二〇元の順位となつて各帮の経済的勢力を反映せしめてゐる。さらに、最大の収入項目は収入利息項目であつて、二二、〇七〇元余に達する。基本財産としての預金(存款)二六八、六三七元九角五占を保  
有してゐたから、その利息に相当するものと推測される。

支出項目の主なものは、

1、屋租

計銀 二、九二五元

シンガポールにおける華僑社会構造の發展

シンガポールにおける華僑社会構造の発展

2、白米、野菜等の食料品	計銀	二、五一三元
3、木炭・茶・タバコ・土油等件	計銀	八三七元二角一占
4、用紙・筆墨・国旗等件	計銀	七一五元一角四占
5、電気・水道代	計銀	二七五元二角
6、慶弔聯軸等件	計銀	四六〇元
7、保良局援助(死体処理費等)	計銀	四二〇元
8、徵信録印刷費	計銀	四〇五元
9、諸雜費・労銀	計銀	一、八三三元六角
10、事務員給料	計銀	六、二二三元

等であつて、その他電報・電話・印紙・広告・弁護士手当・酒席費・新聞代等であつて、以上支出合計銀一七、八六二元であつて、収入から控除して、残額は計銀一二、八四二元二角であつて、当時の総商会はすでに財政的には余裕がみられた。

なお、総商会の収入は、会員の定額会費以外に、総商会建設基金としての寄附金(捐款)は、次の通りである。

一九〇六年度 銀	七、四四〇元	一九〇七年度 銀	一九、三五五元
一九〇八年度 銀	一五、四六七元	一九〇九年度 銀	一〇、三八八元
一九一〇年度 銀	六、六五二元	一九一一年度 銀	一六、七二五元
一九一二年度 銀	一、〇三〇元	一九一三年度 銀	四〇五元

一九一四年度	銀	二、二一〇元	一九一五年度	銀	五、五一三元
一九一六年度	銀	二、二〇〇元	一九一七年度	銀	三、一〇〇元
一九一八年度	銀	一、八〇〇元			

その寄附者名と金額が正確に徴信録に明らかにされ、会董・会員に報告されている。

華僑社会は地方別の各帮にわかれ、既述の通りの各帮が成立していたが、大埔県は潮州に所属していたが、客家であるため、潮帮から離れて、埔帮として一帮を形成し、嘉(嘉应州)帮はその首都の梅県であることからして梅帮と改称されていた。一九三四年からは揚子江下流域の三江(江蘇・浙江・江西・安徽)帮、いわゆる上海資本ともいべき新帮と、さらに「業帮」としての「商業団体」の出現をみるところとなった。

総商会は一九〇六年三月十五日、シンガポール総領事張弼士の主宰のもとに商務總會として同済医院の背面の議事庁を借りて成立したが、同年三月二十七日ヒル・ストリート(禧街)四号に借地して会址とした。最初の正副総理は、福帮の呉寿珍(正総理)と潮帮の陳雲秋(副総理)であって、福建帮と広東帮(広義の)の領袖一年交代制であった。<sup>(2)</sup>

だが、各帮協同で創立された商務總會開設草々、一九〇六年九月には、福建と潮州両帮の労働者達の械闘の発生をみた。<sup>(3)</sup>地方的な郷帮、ことに福建省南部の泉州・漳州、広東省の潮州と惠州・嘉应州出身の客家帮の十九世紀後半における錫鉱区をめぐる械闘は、秘密結社的な公司組織をもって法的秩序の未確立の際でもあって、はげしく展開された。一九二二年社団登記条例が公布されてから、漸次秩序の恢復をみてきた。錫鉱区においてもとはげしく展開されたが、その他の勢力分野の画定に際して、なお依然として伝統的な秘密結社組織の旧体制

#### シンガポールにおける華僑社会構造の発展

が、その後の今日のマラヤの共産党のごとき革命団体ともからみあいながら、発展をみてきている点に、旧套的華僑社会のコースの容易に拂拭されえないものがある。<sup>(4)</sup>

以下、太平洋戦争直前の華僑社会の基磐を構成していた郷帮・業帮・工会・僑生公会について、星州日報刊行の「星州十年」所載のものを参考にして解説すれば、次の通りである。

華僑社会のうち、もつとも勢力の雄厚なものは各郷帮の「会馆」であって、同郷の感情と慣習行事を連絡し、仲間の生活に必要な学校・医院等を経営し、死亡するものについては墓地を設けてその最後まで遺憾ながらしめ生死をとにもする慣行・言語の共通する共同体的集団とみるべきものである。シンガポールに最初にふみいった広東人の曹亞志も姓氏団体としての「曹家館」のほか、台山県出身者としての「寧陽会馆」を設置していた。

(1) 「福建会馆」 Ⅱだが、シンガポール華僑人口のマジョリティを形成するのは厦門周辺の南部福建人の集団であるだけあって、多くの会馆の林立するうちで「福建会馆」がもつとも有力な会馆に属する。「星州十年」の記事のうちには福建会馆の創立は、テローアイエル街(直落亞逸街)に道光二〇年(一八四〇年)に天福宮を建立したことに始まるとされている。(同書、第九三八頁)。だが、天福宮の入って右側の碑記には天福宮建立の年月を「道光三〇年歲次庚茂荔月吉日」とあって、一八五〇年に該当する。

何れにもせよ、海上商人の尊崇する天后聖母を中央の主神として、海上航海の安全を祈り、東堂には商業神としての「関聖帝君」、西堂には長寿神としての「保生大帝」、寢堂(背後)には子孫繁栄の「観音大士」を祭り、他の多くの会馆と共通する混成宗教としての実体を具備している。そして福建会馆議事の場所にあてられていた。

海岸に接するシエントン・ウェイには国家銀行・諸外国銀行・華僑系諸銀行の高層ビルのつらなる近代設備



としてみられるが、一筋北側にはいった海岸に近い福建帮の集中するテロアイエル街は、旧套的な古いチャイナ・タウンの典型であり、新旧相接するこれより甚だしいところはない。天福宮も創建後、百余年をへて破朽の程度は著しい。マラッカにも天福宮があって、福建会館に所属し、仏教的には少林寺と同様曹洞宗系である。

筆頭大董事は「陳篤生」(福建・海澄県、一七九八年マラッカ生、一八五〇年没) = 「Tan Tock Seng」であつて、蔬菜・生菓・鶏鴨の販売を業とし、陳篤生行を經營していたが、一八四五年には「陳篤生医院」を創立し、太平局員 = Justice of Peace (治安別事) の地位が与えられた。同医院は篤生の長子の「陳金声」 = 「Tan Kim Ching」(福建海澄県、一八二九年シンガポール生、一八九一年没) が福建会館の最初の主席に任ぜられた。彼は陳篤生行を弟と合資で「陳金鐘兄弟公司」に改組し、瑞林退出後「金鐘公司」として、サイゴン・バンコク方面にも精米廠をもつシンガポール最大の米商となった。さらに、タンジョン・パガー船渠公司をも創設した。社会的には一八七二年の福帮・潮帮の械闘を調停し、一八七六年には陳民宗祠としての「保赤宮」を新建した。彼のあとには孫の陳武烈等がついでいった。

福建会館と大姓としての陳氏の姓氏団体との関係の深いことは、ペナン・クアラルンプール・ラングーンの福建公司の例とかわるところがない。

「新嘉坡福建会館會員録」(一九六四年度)によると、総會員数二、五四三名のうち、陳姓が最高の會員数をもつ「大姓」であつて、その数は四〇四名であつて、総會員数の一五・九%を占めている。それにつぐものは「林」姓の二四六名、「黄」姓一九〇名、「王」姓の一五三名等の順であつて、「小姓」からは有力な領袖はみいだされない。「郷帮」と「姓氏団体」の結びつきには緊密なものが、なお残存している。革命前の中国に同姓村落が普

### シンガポールにおける華僑社会構造の発展

遍的に存在したことにともづくものとみられる。何れにもせよ、郷帮別の会館は単なる利益的団体ではなく、生死をともにする共同体の根づよい人的集団社会団体であるといえよう。

シンガポール福建会館の前面には、愛同学校と崇福女学校が設置されており、講堂には厦門の風景と陳嘉庚（たんかあやむぎ） Tan Kah Kee（福建同安県人、1874—1961、謙益行、陳嘉庚有限公司）の大きな影像が掲げられている。陳嘉庚は郷里の集美村・厦門にも幼稚園から小中学校、厦門大学、水産学校等の教育事業に彼はほとんど全財産を投じ、一九三四年倒産して、ゴム王の地位を女婿の李光前（りくわん） Lee Kong Chin（福建、南安県人、1893—1971、厦門生、南益樹膠有限公司・南益黃利廠業経営）にゆずり、一九六一年八月十二日中華人民共和国の常務委員として北京で逝去した。北京のプロ文革の際、彼の像は紅衛兵によってうちこわされたと伝えられている。

彼には自叙伝としての「南僑回憶録」上下両冊（中華民国三十五年三月再版、南洋印刷社出版）があって、豪俠の徒ともいふべき華僑資本家の企業家精神を知るには最適の著書として推薦されよう。

彼の族弟の陳六使（たんとくせき） Tan Lark Sye（福建、同安県人、1886—1972、益和樹膠廠経営）も、同様豪俠の徒であつて、一九六三年の対日ボイコットを領導した。彼は兄と同様シンガポールに華文教育の「南洋大学」の設立を主唱し、五〇〇万ドルの寄附のほか、福建会館の五〇〇エーカーの土地をも校址として寄附し、一九五八年その完成をみるにいたらしめた。

彼の甥といわれる、陳共存（たんくわん） Tan Keong Choon（福建、同安県、本年五八才、大鋼鉄廠有限公司董事經理業）は、現在の新嘉坡中華総商会の会長である。陳氏の一族は福建会館のみならず、新嘉坡中華総商会の領袖としても歴代支配的地位を占めてきていた。金融界の筆頭の華僑銀行・大華銀行のみならず、ゴム・海運・造船・米業・貿

易方面に有力な地盤を擁している。

なお、福建会館には、他の郷幫とも共通して同郷人のための恒山亭・咖啡山墳地等墓地をも運営し、養生送死に遺憾なからしめている。そのほか、市中には多くの土地不動産の屋業を保有して会館の恵まれた財政は、多くは社会的公共事業に支出されている。教育面では、小中学のほか、南洋大学に巨額の資金を支出し、政治的には与党の人民行動党と対立していた左翼系の社会主義戦線＝Barisan Socialis にも、援助資金をだし、当時の会長陳六使は一時市民権すら剝奪されさえした。

一九六三年の陳六使の指揮した対日血債五、〇〇〇万ドル要求のボイコット運動もこのような資金逼迫の経過のうちに遂行された。

福建人の集中するテロアイエル街・福建街等が旧套然たるチャイナタウンの還境をなお保守する以外に、その行動方式も本国民間社会の伝統的な反官の気風を踏襲し、現地出生の僑生達が、中国語を解せず、中国的色彩の稀薄化しゆくことに、慨嘆した伝統的な豪俠の気分をことさらに誇示してみせた傾向が、よく窺取さえされえた。その中心人物は日中戦争当時、南洋華僑籌賑総会の会長として、抗日救国運動を展開し、シンガポールに華僑義勇軍を組織する以外に、故郷に厦門大学以下水産・中小学校・幼稚園にいたるまでの教育施設を建設した前述の陳嘉庚（時の福建会館理事長・福建系怡和軒俱本部董事長）と、その族弟の陳六使であった。彼も族兄のあとを踏襲し、マレーシアのラーマン内閣、シンガポールの李光耀内閣とも対立する反官の圧力的傾向が、つよかったが、一九七二年彼の亡きあと新嘉坡中華総商会の会長となった陳共存＝Tan Keong Choong, or K. C. Tan は、陳嘉庚の第二妻の第八子とも伝えられるが、平和的なシンガポール市民としてみかけられ、豪俠の気風は漸次薄

シンガポールにおける華僑社会構造の発展

シンガポールにおける華僑社会構造の発展

らうできている。

(2) 「潮州八邑会馆」 〓 シンガポールの郷帮のうち、第二位は潮帮であり、タンク・ロードに「潮州八邑会馆」 〓 Teo Chew Poit Ip Huay Kwan. (別称義安公司) がある。潮州が晋代に「義安郡」と呼称されていたことから、その祭廟はなお「義安公司」 〓 Ngee Ann Kongsi と称せられ、チャーチ・ストリートに古廟として残存している。潮州八邑は、海陽(民国三年潮安と改称した)、澄海・饒平・潮陽・普寧・揭陽・惠来・南澳であって、潮州府にはさらに大埔・豊順の二県があるが、後来の客家集団の居住県に属するため、バンコクの場合とは相違してシンガポールでは潮帮からは排除されている。

潮州八邑人の言語・慣習・経済生活を通じて、広東省人よりも福建人に近いことからして福佬 〓 Hoklos とさへ呼称されている。

豊順・大邑の両県は、福建省北部の永定県と同様、客家 〓 Hakka, or Khes の居住県であって、三県合して、「豊永大公司」 〓 Fong Yun Thai Co. をベック・シア・ストリートにしている。バンコクの潮州帮は、豊大の両県とも排除しないで行うことは相違している。そのことはバンコクの潮州帮が他帮に比較して圧倒的マジョリティを形成していることに帰しうるかもしれない。

本会館の教育事業としては、一九〇六年「端蒙学堂」を開設し、その後学生数の増加と教育制度の近代化にもない、一九二一年には政府に登録し、一九五一年には中学部を増設し、義安公司に附設されている。さらに、会館の総理と教育委員会の管理下におかれている「義安工芸学院」があり、(1)機械工程系、五カ年 (2)電子工程系、五カ年 (3)商業管理系、三カ年 (4)公司秘書系、三カ年 の四コースがあり、金文泰路に設置されている。

一九六三年には政府の公立となった。

会館の墓地としては「泰山亭」がある。潮幫は福建幫と相似した海上商人型で、言語・慣習も相似している。「福佬」集団であるが、「同行是冤家」とか、「当行厭当行」の俗諺通り、同業同志相対立し、「荷船」=「Tiwakoh」の船つき場の権利について、一九〇六年一月一三日から同月一七日にかけてはげしい闘争が起り、シンガポールの各方面にわたって秩序の混乱をみた福潮の械闘があつた。<sup>(6)</sup>

さらに、同会館について気づかれることは、「新嘉坡中華総商會民國十一・二兩年第十三屆職員表」をみると、各幫総董事数三八名の内訳は次の通りである。

福建幫	一五名	潮州幫	一一名
四邑幫	五名	三邑幫	二名
客家幫	三名	海南幫	二名
合計	三八名		

右のうち第二位を占める潮州幫をみると、郷里の汕頭市に海陽（民国三年潮安と改称）県、澄海県・饒平県の組織していた「海澄饒会館」、筆者はこの三県が韓江に沿っているところから「韓江系」とも呼んでいるが、右の一名すべてが「韓江系」にのみに限られていた。

会長の林義順（澄海県、通美行樹膠、土産、屋地業）以下筆頭会頭の藍偉烈（澄海県、銀行、米業）、陳友礼（潮安県、布疋業）、李英柱（澄海県、再和成匯兌）、劉世根（潮安県、元発機機器米商）等すべて韓江系、もしくはバンコクの大地系に属するもののみで総商會の勢力を占めていた。だが、一九七三―四年度の新嘉坡中華総商會の筆頭名

シンガポールにおける華僑社会構造の發展

シンガポールにおける華僑社会構造の発展

嘗会長は連瀛州＝Lien Ying Chow（潮陽県、華連銀行総理）は、「榕江系」であって、バンコクで最近勢力をえてきたバンコク系に属し、同会財政主任の張泗川＝Teo Soo Chuan（潮陽県、四海機械構董事長及総理）等、榕江系がシンガポールでも総商会の要職につき同邦の内容は大地系（韓江系）からバンコク系（榕江系）へと勢力の逆転をみてしまっていることが明らかにされる。シンガポールでは榕江系の「華連銀行」＝Overseas Union Bank Ltd.（法定資本金五、〇〇〇万ドル、払込金額、二、五〇〇万ドル）の発展をみる一方、韓江系（バンコクの大地系）の「四海通銀行」＝Four Seas Communications Bank Ltd. が、一昨年福建系の華僑銀行＝Oversea-Chinese Banking Corporation Ltd.（資本金一億ドル、払込金額六、〇〇〇万ドル）に吸収合併され終っている。

シンガポールにおける榕江系の華連銀行はその下部機構として次の通りの諸会社を経営し、バンコクにおけると同様、韓江系を圧倒してきていることは見逃せない。<sup>(8)</sup>

登録国名 銀行所有株式百分比

- |                          |        |         |
|--------------------------|--------|---------|
| (1) 華連銀行託管（私営）有限公司       | シンガポール | 一〇〇・〇〇% |
| (2) 華連展業（私営）有限公司         | シンガポール | 一〇〇・〇〇% |
| (3) 華連花園（私営）有限公司         | シンガポール | 一〇〇・〇〇% |
| (4) 華連投資私営有限公司           | シンガポール | 一〇〇・〇〇% |
| (5) 華連信託有限公司             | シンガポール | 一〇〇・〇〇% |
| (6) 新嘉坡星電夜総会遊客購物中心私営有限公司 | シンガポール | 一〇〇・〇〇% |
| (7) 華連展業私営有限公司           | マレイシア  | 一〇〇・〇〇% |

(8) 華連置業私営有限公司

マレイシア 一〇〇・〇〇%

(9) 華連投資私営有限公司

マレイシア 一〇〇・〇〇%

(10) 華連信託私営有限公司

マレイシア 一〇〇・〇〇%

(11) 華連信託(馬來西亜) 有限公司

マレイシア 一〇〇・〇〇%

(12) 華連銀行託管(英國) 有限公司

イギリス 一〇〇・〇〇%

オーチャード・ロードのマンダリン・ホテルも同行の経営である。このような近代的發展をみせながらも、潮帮は依然として旧態然たる「粵海清廟」をチャーチ・ストリートに温存している新旧混交の体制を保持していることを等閑視してはならない。

潮帮には、各帮と同様会館のほかに、日常集會談合するクラブとして、「醉花林俱樂部」(道光二十九年一八四九年創立)がケン・リー・ロードにあつて、集團の与論を明らかにし、来往の賓客たとえば故ウィンザー伯の訪問接待のため等の当座的事項のために有力に利用されている。福帮の「怡和軒俱樂部」(フキ・パス・ロード)のごときは、陳嘉庚の抗日救国運動の本部として機能していた。平常は俱樂部は当該集團の日常の集會場所として重要な役割を果している。有事には政治的に大きな機能を發揮することは見逃がされてはならない。

(3) 「客家帮」 本帮は他の各帮と比較して華南に南遷してきたときは、土着人側から「客家」とよばれ、福広両者の山岳地帯に散在しており、そのうちにもシンガポールでは「豊永大(潮州豊順県、大埔県、福建省の永定県)公司」= Fong Yun Thai Co. 嘉応州五県は「応和会館」= Yin Foh Fui Quan 惠州客家は「惠州会館」= Fui Chew Association もしくは、広州府・肇慶府と合同して、「広惠肇公司」= Kwong Wai

シンガポールにおける華僑社会構造の發展

シンガポールにおける華僑社会構造の発展

Siu Association を組織しよう。

「豊永大公司」は豊順・永定・大埔の三県の墓地を管理する機構であって、永定県のある汀州と豊順・大埔両県のある潮州に相隣接することからして、言語・習俗を同じくし、墓地はホーランド・ロードに共同して「毓山亭」を設け、その山麓に光緒八年（一八八三）「三邑祠」の廟を建立していた。<sup>(9)</sup>

「応和会館」は嘉応州五属（梅県・蕉嶺・五華・興寧・平遠の五県）の公共施設であって、道光三年（一八二二年）にテロアイエル街に創建されたのが、シンガポール最初の会館といわれている。

会館には「応新学校」があり、雙竜山には、義塚・義祠のほか「風雨亭」が建設されている。

「惠州客家」は前述のごとく何故か明らかにしえないが、広州府・肇慶府の客家でない「本地」≡Puntis と共同して、「広惠肇公会」を組織している。だが、テロアイエル街の福建帮の祠廟「天福宮」の東の側には同治八年（一八六九）建立の「福德祠」があり、嘉応州五属と大豊永の八属と福建人章芳琳により共同建設された「大伯公」がある。他面、福建祠の同治九年建立の碑には、広州・惠州・肇慶の三府の共同により同祠前面の諸施設の完備されたことが明記されている。<sup>(10)</sup> 広東帮は墓地についても共同に「碧山亭」を湯申律に設け、嘉応州五属は双竜山墳場、豊永大はホーランド・ロードに墳場を設け、時には共同し、時には分離し、その間の経緯は明らかにしえない。惠州はその言語・習俗が嘉豊大永よりも、広肇系に近いものがあるものとも推測されうる。

客家帮の随一の財閥は、福建省永定県出身の「胡文虎」≡Aw Boon Haw (1804-1954) と「文豹」≡Boon Pias (died 1944) 兄弟は香港・東南アジアのラングーンの永安堂兼行から、各諸国で虎豹兄弟有限公司・星州日報・香港星島日報等の新聞・教育・公益・慈善事業等、社会的にも大きな役割を果してきた。福建帮の陳兄弟と



は相違して保守的な国府系の右派であった。

虎文豹の長子には「胡清才」= Aw Cheng Chye (died 1971) 文虎の長子には「胡蛟」= Aw Kow がおり、いづれも父業の虎豹兄弟有限公司・虎豹永安堂製薬廠・星系報業有限公司・崇僑銀行有限公司を経営していたが、一九七一年福建系の黄祖耀= Wee Chow Yaw (福建・金門・大華銀行董事兼総理・実得力輪船有限公司董事、大衆鋼鉄廠有限公司董事) がイギリス系の商業銀行ウオカー・スレーターを通じてきわめて短期間のうちにテーク・オーバーし、さらに四邑系の「李華銀行」をもテークオーバーし、金融界における福建帮の地位は上昇をみていった。

客家帮は経済面で下位労働者が少なくなかったが、他面子弟の教育に熱心であって、インテリ・自由職業者・教師等の輩出をみ、政治面では大きな役割を果たしている。

マ共総書記の陳平が客家である以外、シンガポールで一九六〇年以降人民行動党(右派労働党)内閣の首相として終始している「李光耀」= Lee Kuan Yew は潮州府大埔県出身の客家であり、大埔客家はシンガポールの質屋業・金銀細工商として独占的に近い地位を占めている。李首相の生家もハイ・ストリートの時計・宝右商であって、父は子弟の教育には熱心で、現地のラッフルズ大学から、イギリスのケムブリッジ大学で法学を学び、帰国後弁護士となった。彼の妻の“Kwa Geok Cheu”もまた彼と同様の過程をへて弁護士資格をえ、一九五〇年九月李光耀に嫁した。<sup>(1)</sup> 学生時代から労働組合運動に関係し、組合の法律顧問となり、一九五四年には、反植民地主義ではあるが、非共= non-communist の民主社会主義の立場をとる「人民行動党」= People's Action Party を組織して、直ちに党秘書長となり、一九五九年五月の大選には圧倒的勝利をえた。同年六月シンガポール自治政府の成立とともに、首相の地位についた。一九六三年九月十六日にマレイシア連邦の成立後も首相の地位をつ

シンガポールにおける華僑社会構造の発展

シンガポールにおける華僑社会構造の発展

づけた。

一九六五年八月九日シンガポールがマレーシアから離脱して自主独立の共和国となつてからも、福建幫と結びついていた左派の社会主義戦線に大敗を喫せしめ、今日まで人民行動党内閣首相として終始している。毛沢東路線のゲリラ抗争を踏襲する左派政党と福建幫の左翼系領袖をおさえて、その後のシンガポールの東南アジアにおける最高の経済成長と社会の平和を、その党名のごとく行動的に実現せしめてきた政治的手腕は、かつての孫文に匹敵して客家の一特性として評価されえよう。ハンチントン＝Ellsworth Huntingtonの著書のうちにも「客家は漢民族のエリートである」としていることも肯定されうる<sup>(12)</sup>。

(4) 「広肇幫」＝広州府と肇慶府は珠江と西江の流れる両府の集団であつて、客家よりも先着民である点で、「本地」＝Punjsと呼称され、本国では広東省西江流域の稲作地帯をめぐつて、本地と客家の対立をみて、一八五四——一八六七年にわたつていゝゆる「西路事件」の械闘があり、同時期マレーシアのペラ州の錫鉱区をめぐる一八六二—七四年におよぶ広幫系の義興ぎひんこうし会社と、客福系の海山かいせんこうし会社とのはげしい械闘が展開され、イギリス軍隊の内政干渉となり、駐在官制度が布かれた。シンガポールでは、海上商人型の福建幫と潮州幫とが発生史的テロアイエル、福建街・潮州街等海岸か、シンガポール河に沿つて集中しているのに対して、手職的・労働者的職人層の多い広肇幫は、南天酒樓のあるシンガポールの中央地帯にその勢力範囲を展開している。

シンガポールにも各幫の対立、秘密結社の存在はきわだつていたが、イギリス政府直轄植民地であつただけに奥地にみられたような長年にわたる械闘として目立つたものはなかつた。すでに、マラヤでは秘密結社の械闘は一八六九年におよんで、「危険社団禁止条例」＝Ordinance for the Suppression of Dangerous Societies が

公布され、<sup>(13)</sup> 後には危険社団のみならず、一般の社団全体の登録を必要とする「社団条例」= Societies Ordinance が一八九〇年一月一日から施行された。<sup>(14)</sup> この点、イギリス政府の天地会・三合会・義興・義福等の諸公司に対する取締りはきびしく、アメリカでは今日でもなお秘密結社組織を採用する兄弟的仲間組織としての「党会」が黙認され、結社の自由性が高度に認められていることとは対照的である。<sup>(15)</sup> 東南アジア諸国のうち、かつてアメリカの植民地であったフィリピンの今日の華僑社会に秘密結社としての「致公堂」以下の「堂会」の残存しているのは、かつてのアメリカ統治の影響によるものとみられる。サンフランシスコは、専ら広肇幫によって形成される華僑社会であつて、<sup>(16)</sup> とくに兄弟的仲間団体が大きな役割を果し、この傾向はマニラ・ラングーン等の各地についても明らかにされる。賭博・飲酒・歌舞等の反社会的サービスの盛んな反面、堂会等の秘密結社が多くみられ、広幫の正常的な経済成長が福幫に比較して後退をみている主要因とも理解される。そのことは、「新嘉坡中華総商会」の第三十三届（一九六五―六年没）職員表についてみると、全董事総数五一名のうち、福幫二二名に対し、広肇幫は僅か三名にすぎない。しかも、正会長は福幫、副会長は潮幫と三江幫各一名であり、各嘗會長五名のうち、三名は福幫、二名は潮幫で、広幫代表はみられない。広肇幫董事三名の出身地は、南海・番禺・順徳の広州市をとりまく商人階層の輩出地帯各一名で、西江方面の職人的生産者層の多い六邑（鶴山・台山・新会・開平・恩平・赤溪の六県）からの代表は一名も選出されていない。この広幫の後退傾向は、各地に共通してみられるところである。商人支配のもとに、職人社会の色彩のつよい広幫の後退しゆく傾向が明らかにされる。

中華総商会初期の「新嘉坡中華総商務總會試弁章程」の第五章「選立会員」の条には、

一、会員は局中人員の通称であつて、正総理一員、副総理一員、協理十員、議員四十員、合計五十二員、各  
シンガポールにおける華僑社会構造の発展

シンガポールにおける華僑社会構造の発展

帮商務の繁簡により、閩粵の名額を分ち定め、別に明らかにする。

二、福建名額、総理一員・協理四員・議員十六員とする。

三、広東名額、総理一員・協理六員・議員二十四員とする。

四、各帮の会員は、各帮自ら推挙を行い、公平になすべきものとする。ただ、閩粵はすでに各総理一員を挙  
げ、よろしく正副に分つて、権限は一人につかさどらしめる。開弁の初年に抽籤できめ、福建が正なれ  
ば、広東は副とし、広東が正なれば、福建を副とし、毎年交代とする。<sup>(17)</sup>

右の条文では、帮別は福広兩帮のみで、広東帮は計四〇名のうち二四名を占め、福帮を上まわっていたが、一  
九六五——六年度の新嘉坡總商會第三十三屆職員表では、董事數計五一名のうち、福建帮二二名のほか、広東省  
の潮州帮一五名、広肇帮三名、客家帮六名、海南帮一名のほか、三江帮四名となり、広東帮の中心の広肇帮も南  
番順三県の三名のみとなつて、福建帮の優位性上昇が明らかにされる。

(5) 海南(琼) 帮 本帮の中華總商會への選出董事は僅か一名で各帮中もっとも低位であることが明らかにされ  
る。海南島が四面海にかこまれ、熱帯圏に近接することからしても、水産品・農産品・鉱石等の一次産品にも恵  
まれ、自足性の高いことからしても、海外への進出は淳風良俗に反するものとして、一九二〇年までは婦女子の  
海外進出の禁令が布かれ、せいぜい男子の季節的、ないしは一時的移民をみる程度にとどまっていたことによる  
ものとみられる。

その団体としての「琼州會館」が創設されたのは一八五七ごろと推定されている。一八八〇年におよんで、  
海岸沿いのビーチ・ロードに琼州會館が建設され、天后聖母を祭神とすることから「天后宮」とも称せられた。

戦前は廟宇は傾きその存在もみられないほどであったが、戦後一九六二年には、高層な七階建て洋式の高層ビルとして再建された。<sup>(18)</sup> 海南帮の経済勢力の向上を反映するものであり、その傾向は他のクアラルンプール・バンコク等の各地とも共通するものがみられる。

海南島はコーヒーの産地でもあることからして、無資力な移民であったことも影響して喫茶店・汽水業を営み、ついで製氷業・漁業にも従事するものがでた。島民生活でジャンクを操ってマラッカ海峡を往来する時としては密貿易にも従事する「海南船長」はいらむきやうてん＝*Hailan Captain*とも呼称された。今日、インドネシアとシンガポール間の貿易統計の公表されない原因は明確にしえないが、正常に通関する貿易額が余りにも少ないことから公表を控えているように推測される。

同会館もまた義山（墓地）、楽善居医院・育英学校を経営している。同会館の夜学校は一九二〇年代南洋共産党の発生の地であったとも伝えられている。<sup>(19)</sup>

バンコクの「泰国海南会館」の会員の圧倒的多数が、海南島東北部の清瀾港に近接する文昌県出身者で凝集しているのに対し、シンガポールの場合は文昌県出身者のほか、同島の東中部の博鰲港の河口に近い楽会県出身者も多数みられることである。姓氏的結集力のつよいことも見逃されない顕著な傾向である。<sup>(20)</sup>

如上、シンガポール華僑社会の伝統主義的な帮派について、概観してきたが、一九六九年の新嘉坡中華総会董事会において、財政主任の康振福（福建省龍溪縣人、四海源有限公司董事經理）によって、帮別制度存続に対する有力な反対意見が提出され、その場合の会議では一応無視されたが、華僑社会に関連する大きな問題点を提供している。右については、別稿で論及することとしたい。

シンガポールにおける華僑社会構造の発展

- (1) 「新嘉坡中華總商會己未年(一九一九)徵信錄」本總商會財政所刷科自印、第三五—五七頁。
- (2) Song Ong Siang, *One Hundred Years History of the Chinese in Singapore*, London, 1923, p. 388.
- (3) 編輯の械斗ごころびだ、Song Ong Siang, *op. cit.*, p. 389. および「新嘉坡中華總商會大廈落成紀念刊」一九六五年刊行、所載「星加坡中華總商會誌記」第一五一頁。
- (4) ヤン・ミン・シンガポールにおける一九一〇世紀のふたの秘密結社の械斗ごころびだ、Wilfred Blythe, *The Impact of Chinese Secret Societies in Malaya, A Historical Study*, London, 1969. のべふたの全五三三頁にわたる詳しい詳説をたづねる。
- (5) 許教正著「東南亞人物志」一九六五年新嘉坡刊行、第一頁。
- (6) Song Ong Siang, *op. cit.*, pp. 402—404.
- (7) 「新嘉坡中華總商會」三十七屆董事職員表」= Chinese Chamber of Commerce Singapore, *Committee Members For the Year 1973—74*.
- (8) Overseas Union Bank Limited 1972 Annual Report, Singapore, 1973, p. 15.
- (9) 南洋客屬總會第卅五・六周年紀念刊」南洋客屬總會編輯委員會、一九六七年八月出版、A 一三〇—三二頁。
- (10) 陳荆和、陳育松編著「新嘉坡華文碑銘集錄」香港中文大學出版部一九七〇出版、第八四—五頁。
- (11) Alex Josey «Lee Kuan Yew» Singapore, 1968, pp. 1—5.
- (12) Ellsworth Huntington, *The Character of Races*, New York, 1925, p. 168.
- (13) Wilfred Blythe, *The Impact of Chinese Secret Societies in Malaya, A Historical Study*, London, 1969, p. 151.
- (14) W. Blythe, *op. cit.*, p. 236.

- (15) 成城大学「経済研究」誌、第二四号所載、内田直作研究ノート「三藩市唐人街の社会構造」(a)―広肇幫の一典型―に「堂会」= Tongs, or Huis に、詳説しておいた。サンフランシスコには一二の堂会が存在している。
- (16) サンフランシスコの唐人街については、前掲註の成城大学「経済研究」誌、第二〇、二二、二三、二四、二五、二六号において、「三藩市唐人街の社会構造」―広肇幫の一典型―の題目のもとに解説しておいた。
- (17) 「新嘉坡中華商務總會試弁章程」(凡十二章) 宣統元年、第二葉、第五章「選立会員」の条。
- (18) 「新嘉坡琼州天后宮・琼州会館大厦落成紀念特刊」一九六四年十二月編印、第六五頁。
- (19) Victor Purcell, *Malaya: Communist or Free?* London, 1954, p. 45.
- (20) 国民経済雑誌、第三六巻、第四〇号所載、内田直作論文「バンコクにおける華僑社会の構造―海南幫の場合」第一六頁。

末尾ながら、故山崎三郎先生のご冥福のほどを心からお祈り申し上げます。